

Title	中世西欧に於ける商業の復活：主としてピレンヌの所説に就いて
Sub Title	
Author	高村, 象平
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1933
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.27, No.7 (1933. 7) ,p.959(73)- 991(105)
JaLC DOI	10.14991/001.19330701-0073
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19330701-0073

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

利益である。現在支那の大問題は融資の問題である。其解決に當つて吾々が實際上の發言權を賦與されて居ることは支那の利益であり、且つ合衆國が支那の借款交渉に於て能動的な役割を持續して居ることはアメリカ貿易の利益である」と(30)

大統領タフトは一九二二年十二月三日議會に與へた對外關係に關するメセージで次の如く言つて居る。「支那に於ける同國の自主獨立を可能ならしむるための金融投資を奨励する政策は、門戶開放政策に對して新生命と實際的適用とを與ふるの結果となつた。現政府の終始一貫せる目的は、支那が合衆國其他の列強との條約で誓つた根本的諸改革を進捗せしめ自國の開発を計るに際し、アメリカ資本の利用を慫慂するにあつた」と(31)

而して一度び失敗に終つた極東に於ける非外交が、爾後の期間に於て如何に重大な効果を齎すに至つたかに就ては、支那に於ける國際借款團の成立と米國の關係を論述する次の機會に於て取扱ふことにしたいと思ふ。

(30) T. W. Overlach; Foreign Financial Control in China. pp. 215-216.

(31) U. S. "Foreign Relations" 1912, p. xi. Neuring; op. cit. p. 265. 非外交 四〇一頁

附記 本篇は拙稿「ジョン・ハイの『門戶開放』宣言」(本誌本年二月號所掲)の續篇をなすものであつて、「支那に於けるアメリカ帝國主義活動」の一節である。茲では日露戰爭後歐洲大戰に至る期間の米國の對支活動中、滿洲に關する部分のみが取扱はれて居る。尙滿洲に關するものだけに就ても、此外に一九一〇年の「幣制改革及滿洲實業振興借款」の問題があるが、これは便宜上國際借款團の問題と共に今回の續編中に取扱ふ事にした。尙今後繼續する可き此の研究に對して識者の御叱正と御教示を賜らば幸甚である。

(一九三三・六・一一)

中世西歐に於ける商業の復活

——主としてビレンヌの所説に就いて——

高 村 象 平

コオランと劍とを手にした回教徒は、一切世界救済の素願の下に、然し「實際には、その農業經濟の爲めの新しい土地、商業の擴大及び手工業の發展の爲めの新しい市場の獲得を目的として」、六三七年から四四年にかけて波斯ササン王朝を覆し、これと相前後してシリアを(六三四—六三六年)、エジプトを(六四〇—六四二年)、亞弗利加北岸を(六九八年)ビザンティン帝國から奪ひ、歐土に渡つては西班牙を占領し(七二一年)、更にフランクを襲つた。この最後の企ては、フランク王國のカアル・マルテルの奮戦によりトル又はボアティエに於いて挫折したが(七三二年)、しかもここに結果したことは、シリアの占領による東洋貿易路の、エジプトの占領によるその「穀倉」の、その他の土地の占領による、そのアラビアの砂漠に於ける過剩人口にとつて必要な市場と土地との、獲得の外に、地中海を挟み、のみならず西班牙に於いてはこの境界をすら突破して、二つの世界的宗教の、即ち回教界と基督教界との對立、これであつた。

中世西歐に於ける商業の復活

この對立は、古代歐羅巴文明を哺育したその土地を分離せしめ、嘗てのゲルマアネン襲來に際してもよく耐えたところの信仰、慣習、言語等を、これ等と全く異なる基調のものと一部分とり代へるに至つた。そして内海文明の發生地たる地中海は、「羅馬の湖水」たることを熄めて、殆どその大部分が「回教徒の湖水」となつた。即ちこの内海が、それまでに果して居たところの東邦と西歐とを結びつける役割はその手からとりあげられて、その代りにそれはこの兩者を隔離する使命を與へられたのである。嘗てはこの内海の存在により、フェニシア人によつて、又は希臘人に、或は羅馬人によつて東邦の文化を享受した西歐が、ここに於いて、この内海の演ずる役割の變更の故に、そのすべてを、全くそれ自身のみの力に倚つて營み行くことを餘儀なくされるに至つたと做すことは、さまで過言ともせられないであらう。

「斯くて歐羅巴の歴史の重心は、地中海沿岸を離れて北方に移り、それまでは史上に於いて纔かに小さな役割を演ずるに過ぎなかつたフランク王國が、ここに始めて大役をかつて出ることになつた。即ち回教徒による地中海の閉鎖とカロリング朝の登場との間には、單に同時性上の一致のみが見られるのではなくして、謂はゞ因果の關係が存するのである」と、アンリ・ピレンヌは云つて居る。彼はまた次の如く語る。「フランク王國は中世歐羅巴の礎石たるべく運命付けられた。然しその遂行した使命は、それに先きだつて、傳統的な世界秩序の倒壊といふことをその必要條件としたのであつた。若しかくの如く歴史の進展がその順當な進路から外れることなかつたならば、カロリング王朝は中世史上に登場を要求されることなかつたであらうし、回教なくしてはフランク帝國は恐らく存在せず、またマホメットなくしてはカアル大帝は識られることなかつたに相違ない」と。(1) これは稍々奇矯の言である。然し中世歐羅巴封建社會の登場を回教徒の歐羅巴侵入の結果と見ることに就いては、吾々は聽くべき深きものあるこ

とを認めねばならないであらう。

(1) Henri Pirenne, *Les villes du moyen age, essai d'histoire et sociale*. 1927. éd. anglaise, *Medieval Cities: their Origins and the Revival of Trade*. by Frank D. Halsey. 1925. pp. 25-6.

茲にその詳細に立ち入る餘裕は無いが、恐らく封建的秩序の基本的特徴たるものは、(イ)自然經濟的關係の優越、(ロ)従つて一切の生産部門中に於いて農業生産が支配的地位を占めること、(ハ)領地的經濟組織と領主に人格的に從屬する住民とを有する大土地所有、(ニ)而してこの各領地の獨立、(ホ)従つて政治權力の分散、等であると云つてよいであらう。然る時は何はともあれ、政治權力と大土地所有との結合、従つて經濟に於ける土地の重要性の絶對化といふことが、封建主義の典型的特徴を形作るわけである。してみれば、前記回教徒の地中海征服によつて商業及び貿易上に致命的障礙を置かれた結果として、フランク王國に於いて、それ自身の資源にのみ依倚するところの自然經濟的諸關係の優越が見られる端緒が作られたと做すことは、容易に首肯し得る理由付けと云はねばならぬであらう。しかも全歐羅巴が殆ど全くフランク王國によつて残りなく代表されて居る當時に於いて、右の事象を以つて歐羅巴封建社會の成立の由因と做すことも非難せらるべきではないであらう。然したゞフランク王國に於けるカロリング王朝の興起を、結局右の回教徒の歐羅巴侵入といふ外部的影響の結果にのみ歸することは、承服し難いところと云はねばならない。といふのは、このピレンヌの見るところは單に表面的の因果關係付けのみであつて、カロリング王朝の興つたことには、この外に更に重要視すべきものとして、内部的因由が存するからである。即ちそれは簡單に云へば次のことがらを指す。

メロヴィンガ王朝によつて統一せられたフランク王國に於いては、その廣大な領土は分割せられて各侯伯の支配

に委ねられて居た。而してフランクの王権は、その近隣との戦争によつて獲得せる土地を従軍者にその報酬として分與したと、並びに當該戦争の頻繁さに基く疲弊とにより、漸次にその基礎を薄くして行つた。即ち一方に於いて王権の縮少すると同時に、他方に於いて獨立的な地方的統治者となつた大土地所有者の勢力の増大があり、しかもこの後者が、當初國王から委ねられた行政上の職務を世襲とするに伴ひ、初めには國王の手に集中されて居たすべての最高権力は漸次國王の手中から喪失されて行くに至つた。そしてその殘餘の中央権力を、掌握した宮宰(Major domus)の職さへも「最も強力且つ富有な一地主の世襲物」となるに及び、「この一門の代表者の一人」であり、且つ前記サラセンの侵入を撃退して國威を擧げたカアル・マルテルの子たるピビン・フォン・ヒリスタルが、右の經濟的には全く無力化して居たメロヴィング王朝を、法王ザカリアスの承認を受けた上で、これを廢してここに新たにカロリング王朝を建てたのであつた。即ちカロリング王朝は、ひとりサラセンの侵略を原因としてのみ史上に顯はになつたのではない。フランク王國內部に於ける、王権の經濟的無力化をまたその興起の因由とせねばならないのである。更には、この王権の縮少を來したところの大土地所有の發展にこの原因を求めねばならないのである。従つてこの意味に於いてピレンヌが、「ピビンのクウデタアは一王朝が他の王朝にとつて代つたことに止まるものではない」と述べた言葉を玩味せねばならないと考へられる。この注意の下に、本稿は彼の著書の示す跡を一部分、即ちそれは十一世紀に於ける商業の復興を、そしてその限りに於ける中世都市の成立の一斑を、辿り行く企てを持つのである。

(2) Pirrenne, Op. cit. p. 26.

二

まさに、大約九世紀以降の歐羅巴に於ける社會的經濟的構成は、これに先き立つところの古代のそれと確然と區別せらるべきものである。それはこれに先行する諸世紀の單なる繼續にとゞまるものでもなく、またかくの如く見らるべきものでもない。この二つのものは、その各に於いて判然と區別せられるところの社會的經濟的的政治的生活領域に於ける別個の秩序に屬するものと云はねばならないのである。

然しかかる概括化は、直ちに一部史家の反對するところとなることは言を俟たないであらう。右の如く古代と中世とがそれぞれ別個の社會的經濟的構造を持つとまで云はないでも、更に一步を譲つてピレンヌの如く中世社會が古代の傳統の破壊の上に打ち建てられたと比較的穩かな立言を以つてしても、要するに中世社會の發展の獨自的特質を強調する場合には、古代と中世の繼續を、即ち發展の繼續を主張する論者にとつては、悉く好個の反駁の對象とならざるものはないのである。例へばアルフォンス・ドプシュの如き、ハインリッヒ・ジイフェキングの如き、まさにこの後者に屬するものである。素よりここに擧げた兩史家と雖も、それぞれその主張の論據とするところは異なる。

問題を簡單にする爲めに、右の如き概括化を歴史研究に於いて行ふことの是非に就いて論ずることは差し控へよう。それは、本稿の企てる所と餘りに懸け離れた問題でもあるから。(3) 更に右のうちドプシュの論駁も、茲にはとりあげないことにしたい。といふのは、彼は、かの民族大移動によつて經濟的様相は何等本質的變化を蒙らなかつたとすることに於いて、そして地中海が經濟の中心點を形成して居た限り、商業並びに貿易は依然としてその繁榮を維持したとすることに於いて、(4) ピレンヌと共通點を有するからであり、これに次いではこの主張を證明す

るものとして彼が擧げた多くの史實を一々検討することは、(5) 現在の筆者の有する用意を遙かに越したことであり、同時に縦令一部分これをなし得るとしても、それは十分に獨立の論稿を構成する豊富な内容を持つからである。(6)

- (3) 本誌第二十六卷第十號に於いて筆者は、この問題を一應類ふところあつた。——拙稿「經濟發展段階論の構造」參照。
 (4) ドブニヤは、四七六年に政治的領域に於いて羅馬の支配の崩壊したことは、決して文化の全き没落と結びついてゐるものでない、と云ふのは、羅馬の地に新たに國家を築いたゲルマヤノンは、文化を有せざる蠻族では決してなかつたから、と云つて居る。

——Alfons Dopsch, Wirtschaftliche und soziale Grundlagen der europäischen Kulturentwicklung aus der Zeit von Caesar bis auf Karl der Grossen. 1920. Tl. II. S. 527.

- (5) Vgl. Alfons Dopsch, Die Wirtschaftsentwicklung der Karolingerzeit vornehmlich in Deutschland. 1922. Bd. II. S. 180 ff.

- (6) ドブニヤの見解を要約せるものとして、Dopsch, Naturalwirtschaft und Geldwirtschaft in der Weltgeschichte. 1930. が好個であらう。

残る當面の問題は、ビレンヌの主張に對するジイフェキンの反駁が、果してその企圖する如く、反駁たるに値するものであるか否かの吟味でなければならぬ。

ジイフェキンもその總てに於いてビレンヌに反對するものではない。然し彼が後者の論斷を容認する點は、カロリング朝時代が新たなエポックを意味するといふ一事に於いてのみである。しかもこの認容のすぐ後に續いて、「古代と中世との間に本來的の區別を置かんが爲めに、ビレンヌの爲したやうにカロリング王朝とメロヴィンガ王朝との間の差異を強調することは果して正しいであらうか」と疑問を放つて居る。(7) そして彼はこの間に自ら次の如

く答へる。即ち、

メロヴィンガ王朝時代に於いて交易の發展が著しかつたにも拘らず、これに續くカロリング王朝の下ではこれが萎縮したことは、交易の決定的崩壞が既に後者の時代に入る以前に行はれて居なければならぬことを示す。——ではこれを彼自身は何處に見出すのか。——三世紀に於ける古代の交易經濟の瓦解の後に於いて、アウレリアヌス、ディオクレティアヌス、コンスタンティヌスの支配の下に新たに帝國が建設されたことは、全く新たなエポックを齎したと云はねばならないが、この古代後期の經濟組織の內的發展の中に、吾々は決定的な新たなものを見出すべきである。即ちこの時に形成されたグランドヘルンシャフトこそ西歐の經濟發展にとつて決定的なものであり、そしてそれはまたカアル大帝治下に於ける決定的要素でもあつたのである。従つてビレンヌが九世紀に於いてグランドヘルンシャフトの成立を當時の外部的狀態に歸したことは誤りであつて、それはまさに、この古代後期に起源するグランドヘルンシャフトの有機的變形と見なければならぬものであり、又その發展の繼續であることが強調されなければならぬのである。(8)

- (7) Heinrich Sieveking, Der Kaufmann im Mittelalter: in Schmollers Jahrbuch. Jg. 52. (1928). II. Halbband. S. 1032.
 (8) Ebenda, S. 1032-3.

これは結局前節に於いてカロリング王朝興起の内的原因たるものとして掲げたところが、ジイフェキンによつて、その興起の、従つてまたこの王朝を境としての自然經濟的諸關係の優越の、唯一の原因として擧げられて居ること外ならない。即ちここに於いて吾々に了解せられることは、中世封建社會の成立の原因として、ビレンヌの説くところはその一半のみ、そしてまたジイフェキンの述べるところもその他半のみに過ぎないといふことであ

る。してみればジイフェキングの反駁は反駁たらずして、却つてそれ自身のうちに、史上の發展を内的必然性のみ
に基かしめるといふ方法論上の缺陷を自ら顯はにするものと云はねばならないであらう。

三

前述の如く、回教徒の地中海貿易掌握によつて、歐羅巴に於いては自然經濟的諸關係の優越的過程が顯はに開始
されるに至つたが、このことは、カロリング王朝時代に於いて、謂はゞカアル大帝の帝國が内陸的國家たることを
その本質としたことを意味する。即ちそれは對外的交易を缺くところの謂ゆる封鎖的國家であり、海外市場を有せ
ざる國家であつたと云はねばならない。かくしてこそ、そのあらゆる生活領域に於いて土地の占める重要性の絶對
化の意義は確かめられる。(9)

(9) この點に於いて、かの民族大移動によるカロリング王朝以前の時代の經濟的社會的發展は、甚だ異るところの、寧
ろ別個の結果を齎したのであつたことは、前述せる如くである。即ちゲルマアネンの來襲によつて、その結果羅馬
帝國は、純粹農業經濟にのみ轉じもしなければ、また従つて都市生活並びに商業活動が沈滞したのではなかつたの
であるから。

勿論カロリング王朝治下に於けるこの轉化が一舉に、そして徹底的に行はれ得たわけで決して無いことは、斷る
までもないであらう。例へば、世界交易史上に於いて特異の地位を占める香料は、この王朝の下に於いても依然と
してその輸入が繼續されたのであつた。問題はたゞこれが、フランク自らの手によつて直接能動的に行はれること
比較的小かつたといふ點に存する。しかもそれはフランクが進んでこれから手を退いたのでは決して無く、これを

試みんとする熱望にも拘らず、自然的人爲的障壁によつてその實現を止むなく阻まれたに過ぎない。即ちこの香料
貿易は中世を通じて回教權力の獨占するところとなつたのであるが、素よりそれはこの回教徒が海上支配を層一層
鞏固にしたことに基く。即ち九世紀を通じて、それは西班牙の南方バレアリック諸島を、コルシカを、サルディニ
アを、シシリイを占領し、又その征服途上に於いて彼等は亞弗利加沿岸に新都市を、即ちその商業上の根據地を作
つた。例へばティユニス(六九八—七〇三年)、その南方にメメディアを、カイロ(九七三年)。そしてその兵
器庫を建造したパレルモは、ティリニアン海に於けるその根據地となり、その船隊はこの海上を全くその支配の下
に於いてこれを横行したのであつた。或はその商船は西歐の物産を一應カイロに運び更にこれをバグダッドに送り、
或はプロヴァンスや伊太利の沿岸を掠め廻つた。これ等劫掠者の一群は八八九年にニスより程遠からぬフラクシ
ネトゥムを占取し、その後約一世紀に互つて近隣の住民を絶えず脅かし、更にはアルプスを越えて佛蘭西より伊太
利に通ずる道路を襲つたのであつた。(10)

(10) この種の史實は Aloys Schulte, Geschichte des mittelalterlichen Handels und Verkehrs zwischen Westdeutschland
und Italien. 1900. Bd. I. に多く掲げられて居るやうであるが、未だ筆者はこの書を被見することを得ない。

かかるサラセンの劫掠を防がんとしてカアル大帝とその後繼者たちが努力し、しかも遂にこれが、その後十一世紀
に於けるノルマンの侵略に對抗せんとしてこれを得なかつたことと同じく、失敗に歸したことは、共にフランク王
國が本質上、内陸的の國であつたことを説明するに當つて好個な、そして最も理解し易いものであらう。蓋しこれ
等の侵略に對しての防禦には、海軍力を必要とする、しかもこの王國はこれに耐ふべき艦隊を有することなかつたの
であつたから。而してこの状態からして當時に於いては商業の存在が、従つてまたその諸産業部門間に於いて占

める地歩が、重要さを持つものでなかつたと云はねばならないと、ピレンヌは説く。勿論彼はその際にも、この九世紀に關する諸文献中に商人 (mercatores, negotiatores) に就いて記録せられることあるを認めるのであるが、然しこの期に於ける文献の數量に比してその記載極めて少きことからして、更にはカアル大帝の諸法規中に商業に關するもの甚だ少きことからして、それ等は重要性を帯びること大ならざるものと論斷する。(11) この點に關して、彼は、例へばドブシェの如きとは、全く對蹠的地位に立つと云はねばならない。(12)

(11) Pirenne, Op. cit. pp. 31-2.

(12) Siehe Anm. 5.

要するにカロリング朝時代の商業は甚だ縮少された範圍のものであり、英吉利海峡に臨んだクアントヴィック、ライン下流のドルンテッデの兩地に於いて、メロヴィンガ朝に引き續いてフランダースの織物等の船舶運送の行はれる以外には、當時の商業と稱すべきものは、葡萄酒、鹽等の必需品の輸送、禁斷の奴隸賣買、東洋の財貨が西班牙又はヴェニスから猶太人の仲介によつて物々交換的に行はれて居たのを指すに過ぎない。従つてピレンヌは専門の商人階級が正規的に交易に従事することは、回教徒の侵入による地中海閉鎖以後に於いてその跡を辿ることを得ないと云ふ。(13) しかもこの九世紀に於いて多數の市場 (mercatus) の存在した事實は、何等右の確認と矛盾するものでないのである。と云ふのは、それ等の市場たる單に地方的な小市場に過ぎなかつたのであるから。そしてこの市場に來り會するものは、領主家屬の從屬者であり、決して商人ではなかつた。更に西歐の經濟的衰頹を證するものに、ビビンによつて始められカアル大帝によつて完成せられた貨幣制度の改革がある。それは具體的に云へば金貨 solidus の廢棄とこれに代はるに銀貨 deniers を以つてしたことである。そしてこの改革によつて單に名目貨幣

たるにとどまらしめられた前者と、茲に實際の本位貨となつた後者との、それぞれの含有金屬價值を検するならば、後者は前者の約三十分の一に過ぎないのであるが、このことは、當時の交易と財富とがいづれも甚だしく衰退し行きつゝあつたことを物語るものであらう。勿論ビビンと云ひ、カアル大帝と云ひ、共にメロヴィンガ朝末期の貨幣流通の混亂を矯めんと欲するに當つて、遂にかくの如く金貨流通を放棄するの止むなきに出でたのは、ゴオルに於ける金の存在量の減少に原因するもの、しかも尙このことたるや、地中海商業の阻止せられたことに結果するものと云はねばならない。と云ふのは、當時コンスタンティノオブルとの通商を維持して居た南伊太利に於いて、金貨流通が保持されて居たことから見ても、右の擧の餘儀なきに出でたことが明かであらうから。しかのみならず、九世紀の貨幣制度上更に留意すべきことに、その不統一といふことが存する。即ちカアル大帝並びにその後繼者は deniers を王室の手によつてのみ鑄造せらるべきことを布告したのであつたけれど、遂にこれを完全に遂行するを得ず、殊にカアル大帝の末子ルッドヴィヒ・デア・フロムメの治下に於いては、鑄造權を教會に許し、更に九世紀後半以降は、市場權の許可が該所に於ける鑄造權の許可を伴ふことを普通とするに至つた。この結果各種の貨幣の混交して流通することを見たのであるが、これは結局中央權力の微弱と、交易の沈滞とに歸せらるべきものでなければならぬ。(14)

(13) Pirenne, Op. cit. p. 35.

(14) Eberda, p. 36-8. Vgl. Georg Waiz, Deutsche Verfassungsgeschichte. 2. Aufl. Bd. IV. 1885. S. 52-3.

かかる商業交易の萎縮と、その他面に於ける王權の弱少化とは、その他多くの經濟的社會的・政治的・生活領域に於ける諸側面からも説明せられ得る。しかもこれ等のうちに於いても、財政方面の觀察を以つてこれに當てることが、

比較的容易であり、且つこの財政制度の検討は當然これとその時代の軍權及び教權との密接な關係を前面に引き出すことになるのであるから、封建社會成立の過程を描き出す爲めにも便宜である。では、それは如何なる状態にあつたのか。

カロリング朝治下にあつては、税制、金融統制、財政上の中央集權化、役人の給料・公共事業・軍備の維持等に當てるに足る國庫、これ等のすべてを缺いて居た。約言すればこの財政上の無力が、その政治的構造を經濟的基礎の上に維持することを不可能ならしめたのであつた。といふのは、その根幹たるべき經濟的構造が、その上部構造を支持し行くだけの負載力を有し得なかつたからである。

例へば王室の収入は、その王領地よりの収入と、被征服種族からの貢納と、戦争による捕獲品とより成るものに過ぎなかつた。この外に、國庫を填充するものと云へば、河川又は道路による商品の運送に對して課した物品の強請によるものであるが、これとても、橋梁、道路等の維持に當てらることはなくして、これを徵收する役人の懐を肥やすに役立つのみであつた。彼等を監督すべき官吏(missi dominici)も、右の弊を矯すを得なかつた。と云ふのは、素々國家がこれに報酬を支拂ひ得なかつたのであるから、その權力の及ぶ筈がないのである。この爲めにこの職務は、俸給支拂を必要としない伯(Graf)及び邊境伯(Markgraf)に委ねられたのであつたが、このことたるや、フランク帝國分解の根源をなすものであり、ここにまたカロリング朝が一方に於いて國權の鞏固化に努め、しかも他方に於いて伯及び邊境伯の謂ゆる地方的大地主に地方の統治の職務を分つて結局その政治的自立を鞏固たらしめるの矛盾を包藏するを示すものと云はねばならない。そしてこの事情の中に封建制の成熟過程が見られるわけである。

更にこの王朝に於ける經濟的基礎たるものは、云ふ迄もなく土地であり、地主であるが、嘗て羅馬のラティフン

ディウムを現出するに與つて力あつた小地主の消滅は依然として繼續され、殊に後者がその身の保護を求めて強大な大地主に歸依することは、ここに益、この王朝の經濟的基礎を劣弱ならしめる機縁をなしたと云はねばならない。而してこの外に教會に諸特權が許與せられ、それによつてその勢力を強大化する過程が、大地主の自立過程と相伴ひ行き、ここからしても國權の弱少化が促進せられたのであつた。

扱で、ここに於いて成熟の道程を辿つた封建制、殊にその經濟的地盤たるグランドヘルシャフトの形態や組織に就いて述べることは、本稿の課題の領域外に屬するであらう。要するに、九世紀は謂ゆる封鎖的家内經濟の黄金時代たるものであるが、この直接欲望充足經濟形態下に於いて利益追求の欲求は全くフレムトなものであり得たであらうか。ビレンヌは通説に反對して、追求せんとしてもこれを得なかつたが故に餘儀なくこれを中止したに外ならないと云ふ。即ち商業の杜絶によつて市場への道が閉鎖されたが爲めに大地主はその土地産物を賣却することが出来なかつた結果であり、従つてこの九世紀に始まる封鎖的莊園經濟組織は謂はゞ強制せられての現象、變態的現象であると做す。⁽¹⁵⁾ 然し乍らこの立言たるや、一に前述せる如く、彼がイスラム侵略の影響にその重點を置くこと、即ちカロリング朝時代の經濟形態を内的進展の結果と見ないことから出で来るものであつて、單に變態的現象であると云ひ切ることの誤謬はここに繰り返へすまでもないであらう。

(15) Pirenne, Op. cit. pp. 46-7.

四

かかる農業を以つてその本質的なるものとする九世紀の西歐に於ける經濟組織の中に、都市は存在して居たであらう。

らうか。勿論この場合、「都市」を如何に解釋するかによつて、その解答は様々なものとなるであらう。そしてまたその解釋は、當然都市の起源についての問題と關聯する。

中世都市の起源を那邊に求むべきかに就いて、様々の説が唱えられ、そしてそれが未だ現在に於いても歸一するところなきことに就いては、敢て述べるまでも無いであらう。殊にそれが經濟史的立場によるものと、法制的立場を主とするものとの間に、混交が生じて以來、特にその甚だしきものを見る。(16) 然し今、これ等を一々とりあげるとは到底本稿のよくするところではない。問題はビレンヌが如何なる立場をとつて居るかを知るに在る。

(16) この論争の詳細に關しては、本誌第二十一卷第十一號所載、奥井教授「市場と都市發生」參照。この外には、ゾムバルトの、マクス・ヴェーバーの、シュトリイダアの諸説をその主なるものとして參照すべきであらう。

ビレンヌは中世都市を以つて、自然的條件に恵まれて交易の中心點となつた、或は再びなつた地點に、商業人口が聚集し、かくてその成立を見たと言ふ。然しこの結論を導き出す前に、如何なる途が辿られたかを見る要があるであらう。

先づ第一に、本節最初に掲げた問に對して答へるところがなければならぬ。カロリング王朝時代に於いて見出し得るところは、行政中心地並びに城塞を以つて都市と呼ぶ場合に、これに該當するもの存在を見るのみである。従つて都市を以つて、商業活動にその身を委ねる人口聚落と解する場合、或は、法人格を賦與された共同體にしてそれ自身獨自の法制を有するものと做す場合には、この時期に都市は存在しないと答へざるを得ない。即ちこの九世紀に於いて都市が存在したといふ場合にはそれは、社會的意味の、又は經濟的意味の、又は法制的意味のものではなくして、單に城塞と行政中心地とを以つてこれにあてると外ならない。従つてその住民は、騎士と僧侶とそれ等の從

屬者とより成り、それは *Burgenbevölkerung* であつて、*Stadbevölkerung* ではなかつた。その生活形成はその外部の社會一般のそれと何等異るところを見ないものであつたと云つてよ。即ち商工業的活動は全然かかる環境にある彼等にとつて全くフレムトなものであり、その生活は全くこれを繞る農業經濟に倚つて營まれて居たものであり、謂はゞ、消費者としてその經濟的役割を演じたものに外ならなかつた。従つてそれは *urbium* 的な性格を有せざるものであつた。それは *city* と呼ぶべきものに非らずして、*town* 又は *burg* と名付くべきものであつた。然し乍ら、これ等はまた、都市 (*city*) に移るところの階梯であつたのである。即ちこの城壁の周圍に都市が形成されたのであつたが、然しそれは勿論十世紀に於いてその最初の徴候を現はし始めた經濟的ルネッサンス後に於いてのことである。(17)

(17) *Pirenne, Op. cit. pp. 76-7*

このビレンヌの答解は、吾々をしてアンリ・セエの言葉、「都市の復興は實際に商業の復興と密接した現象である」(18) を、想起せしめるに十分であらう。と同時に、この行政中心地にして且つ軍事都市であつた羅馬の舊都市がブルクとして、かすかながらもその生を續け、そして十一世紀以降の經濟復興に際して再びその面目を新たにしてみ中世都市として吾々の眼前に立ち現はれた時に、それが「傳來の細きつなぎの絲に、單に量的なものが接されたのみでなく、質的に全く新たなものが結びつけられた」(19) ことが考へられなければならないであらう。この質的に全く新たなものとは、新たな商人聚落の形成を指す。即ちジイフェキンは語る、「羅馬の支配の末期に於いて既にケルンの人口に甚だ減少し、ケルンは、僅少な交易の場所、外國商人の會合地點、商工業者の集合地たるにとまつた。然し十一世紀以降このケルンには、古き聚落と城市との傍に、新たな市場都市を明かに見出すことが

出来るのである」と。(20) 然しこの言葉の中には、更に別な疑問が含まれる。即ち中世都市は、結局のところ十一世紀に於ける商業復興に際して羅馬の舊都市の上に再興したもののみであるか、否かである。即ちそれは、古代に於けるものとの連続を認めるか否かである。然しそのいづれにせよ、それは中世都市發生の契機を爲した商業の復興が物語られた後に於いて解かるべき問題である。

(18) Henri Sée, *Esquisse d'une histoire économique et sociale de la France depuis les origines jusqu'à la guerre mondiale*, 1929, p. 92

(19) Sieveking, *Op. cit.* s. 1033

(20) Ebenda.

五

ノルマンの騎士が南伊太利に於いて、ビザンティン人及び回教徒と戦つてこれに勝ち、更に彼等はウィリアム侯の指揮の下に英蘭を征服し、他方基督教徒が西班牙に於けるサラセン人を征討した等々の企ては、漸く目覚められる大陸内地人のエネルギーと精神力と社會の健全さを示すものに外ならず、かくてこの土著人が新たな力をかち得つつあることをその特徴の一つとして十一世紀は明けると、ピレンヌは云つて居る。(21) 言葉を換へて云へば、その特徴は、集約的農耕方法採用による生産力の發展と従つて餘剰生産物の生産、更にはこの期に於ける人口の急激なる増大等々である。この結果、新たに開拓すべき場所を求めての東方植民、傭兵志願者の増加、その他いかなる形をとるにせよ、仕事と利益とを尋ね求める「使用されざる新鮮な力の餘剰」(ドオレンの用語に據る)を、至るところに見出すことが出来る。しかもこのものは、ひとり農業生産の擴大によつてグランドヘルシャフト解體の方向への一

歩を進めたのみでなく、更には交易に影響を及ぼしてこの解體過程を促進するに與つて力あつたのである。即ち、この十一世紀は商業の復活を齎したのであつた。

然しこの商業復活に關するピレンヌの説明は、特異なるものを持つ。と云ふのは、先づ彼は、この復活を以つて南方ヴェニス及び北方フランダース沿岸の二つの活動中心地からの刺戟に基づくものと做す。即ちこの復活を外部的刺戟の結果とのみ見るのである。この二地點に於いて行はれつゝあつた外國貿易と接觸することによつて、復活の曙光は訪れたと説くのである。そして更に云ふ、「これとは全く異つた経過を辿つて、即ち商業活動は、一般的經濟生活の趨勢によつて復活を見ることもある。然しここに於いては事實さうではなかつた。即ち、西歐の交易が外國市場の閉鎖と共にその姿を消したと同じく、今やこれ等の市場が再開されたとき、その交易は更新されたのである」(22)

これは斷るまでも無く、本稿の最初に當つて注意するところあつた彼の見解の重點の在り場所に由来するものである。この批判を重ねて行ふことは不要であらう。

(21) Pirrenne, *Op. cit.* pp. 80-1.

(22) Ebenda, p. 83.

とは云へ、十一世紀西歐に於ける商業の復活とヴェニス又はフランダース沿岸諸都市との關聯を、ピレンヌは如何に見るのであるかを、一應辿ることは必要であらう。勿論この場合、ヴェニス自體の檢討は、フランダース沿岸の都市自體のそれと同じく、それが商業の復活に關する限り、これを行へばよいのである。従つて、ヴェニスがその位置する自然的條件からして、他との交易に従はざるを得なかつたこと、またそれが故に數々の征服者の手から

免かれたことの経緯はここに必要としないであらう。(23) 必要とすることは、他の支配を受くること無かつたが故に、この都市が十一世紀に於いてもビザンティン帝國の一端を形成し続け得たことである。そして西歐が東洋と分離する後に於いても、尙この都市が東洋の一部を形成し得たことである。そしてこの特殊条件によつて、ヴェニスの商業は榮え、西歐のそれに優る様々の文化は誘入せられ、この地に於ける企業形態や政治組織を特異なるものたらしめられたことである。

(23) 詳しくは次の諸論著参照。

— Reinhard Heynen, Zur Entstehung des Kapitalismus in Venedig. 1905

Ludo, Moritz Hartmann, Die wirtschaftlichen Anfänge Venedigs. in: Vierteljahrschrift für Social- und Wirtschaftsgeschichte. Bd. II. S. 434-42.

Margarete Meropes, Die venezianischen Salinen der älteren Zeit in ihrer wirtschaftlichen und sozialen Bedeutung. in: Bd. XIII. S. 71-107.

Ditto, Die ältesten venezianischen Staatsanleihen und ihre Entstehung. in: Bd. XV. S. 381-98.

Clemens Bauer, Venezianische Salzhandelspolitik bis zum Ende des 14. Jahrhunderts. in: Bd. XXIII. S. 273-323.

この都市にとつては、回教徒との交易が利益多きものであるならば、彼等が基督教徒の敵であることは、何等の擧を阻止する力あるものではなかつた。九世紀以後に於いて、アレppo、カイロ、ダマスカス、カイルワン、パレルモとの間に於ける交易はその頻繁さを加へ、ヴェニス人は種々なる通商條約によつてイスラムの諸市場に於いて特權を獲得した。尙又その經濟的進展は當然伊太利各地との交渉を生み、十世紀に於いてロムバルディアは全地域に互つて商業活動にその身を委ねるやうになつた。そして回教徒との交易は、ひとりヴェニスの獨占するところ

ろではなく、パリ、タレントゥム、ネエプルス、アマルフィの孰れもヴェニスと同じく、コンスタンティノオブルと交通した。これ等南方諸都市の海運は、北方沿岸諸都市の競争を生んだ。かくて十一世紀初頭以降、ジェノアが、(24) としてこれに次いでピサが彼等の前面に現はれ來つたのである。一〇一五年に於けるこの二市のサルディニア遠征、一〇三四年に於けるボナ占領、一〇六二年に於けるパレルモの敗北、一〇八七年に於ける右の二市の艦隊のメメディア攻撃。これ等の遠征は、ピレンヌによれば、冒険心に基くものでもあれば、宗教心に基くものでもあつた。即ち彼等が基督と教會との兵士であると自恃し、そしてイスラムに對抗する使命を授けられたものであると考へたことこそ、これ等北方都市のかかる企ての一半は理由付けられると云ふ。(25)

かくの如くイスラムは漸次その勢力範圍を基督教徒の手に譲り渡しつゝあつた。例へばサルディニアの(一〇二二年)、シシリイの(一〇五八—九〇年)、コルシカの(一〇九一年)征服によつて、九世紀以來西歐を封鎖状態に置くことを可能としたサラセンの根據地は奪還された。そしてこの後退を決定的ならしめたものは、まさに第一十字軍(一〇九六年)に外ならない。一〇九九年、この年を以つて全地中海は西歐の海運に再び明け渡され、嘗ての羅馬時代に於けるが如く、それは再び歐羅巴の内海となり、かくてこの内海に關する限りに於いてイスラム帝國はその終りを告げ、レヴァント諸港の海運は基督教徒の掌中に歸したのであつた。

(24) ジェノアの海運業に就いては、E. H. Byrne, Genosse Shipping in the Twelfth and Thirteenth Centuries. 1930. 參照。

(25) Pirame, Op. cit. pp. 90-1.

かかる轉化はヴェニスにとつて容認し難きところであることは云ふ迄もない。この都市はその舊來の獨占を侵蝕

されたのであるから。當然この海岸諸都市間には争闘が捲き起された。その相互の間に於ける利害の相異はこの内海をして、ケエザルの帝國時代に於ける平和な状態と全く正反對の、敵意に充ち満ちた、そしてその覇権を相競ぶ場所たらしめたのである。然し乍らその他面に於いて海上商業の發展は著しく、十二世紀初頭、それは佛蘭西に、そして西班牙に達し、メロヴィンガ朝以降沈滞の域に彷徨して居たマルセイユは新たに活動を始め、カタロニア、バルセロナ等相續いて開發されるに至つた。然しこの經濟復興に際して全伊太利は素より優勢を保持し、東はヴェニスから西はピサ、ジェノアから地中海の商業活動の全部が流入するところのロムバルディアの肥沃な平原には、幾多の都市が相續いて現出した。商業の發展は農業の外に工業を勃興せしめ、その餘剰生産物と新鮮な活動力とは、國外擴張を追ひ求めしめ、南方に於いてはタスカニイをその手中に收め、北方にはアルプスを越えて、即ちシュプレウゲン、セント・ペルナード、ブレンナアを通つて、大陸内部へ彼等商人はその健全な刺戟を齎したのであつた。そして東へはダニュブ、北へはライン、西へはロオネの各河川に沿つて進んだ。十二世紀初頭フランダスの諸定期市には、可成りの數の彼等の参加を見ることが出来るのである。

このフランダスに於いては、⁽²⁶⁾ 前述せるドルシテッデ並びにクアントヴィック兩港の活躍に見られるが如く、カロリング朝時代に於いて商業活動は他のいづれの地にも優つて居た。この現象は、この地方を多數の河川、例へばライン、メエズ、シエルト等が貫流し、しかもそれ等相互が各所に於いて相交錯して居ること、英蘭及びスカンディナヴィアに近いこと等をその直接の原因とする。殊にこの後者の理由は又、ノルマンの侵入を誘ふ機縁を爲した。素よりノルマンは單なる海賊ではなく、あらゆる方法で富の獲得を求むる企業心に富む商人であつたとするならば、彼等が新交通路を開き、西歐市場に新商品を齎したことは當然であらう。⁽²⁷⁾ そしてこのスカンディナ

ヴィア人を仲介者とする交易の流れ、即ちビザンティウム及びバグダッドを始點とし、キエフ、ノヴゴロドを経て北海に達するものが、希臘並びにアラビアの高級文化を北歐に運んだのであつた。前掲ヴェニスの商業活動がロムバルディアに活氣を與へた如く、このスカンディナヴィアの船舶はフランダス沿岸を目撃したのである。而してその地形のより、恵まれたが故に、クアントヴィックの代りにブルッヂェが、フランダス伯の努力にも亦依倚して、新たに商業の中心となつた。殊に十一世紀ドルシテッデの衰頹と共に北歐の交易は益々この地に集中された。勿論フランダスに於ける商業が重要さを帯びるに至つた原因としては、この外に、この地に於ける羅馬時代からの工業、殊に織物業の存在があることは勿論である。そしてこれ等諸要素の協働によつて、この地フランダスは十世紀以後經濟的活動を見るに至つた。尙北歐の船舶によつて目撃させられたのはフランダスのみではなく、ネエデルラントに注ぐ河川の流域にもその反響が見出される。即ちシエルト流域のカムブレ、ヴァレンシヤ、メウゼ流域のリエヂュ、ユイ、ディナン、ライン流域のケルン、マインツ等は、十世紀に於いて交易の中心地であつた。そして大陸内地は、徐々に伊太利から又はネエデルラントからの經濟的運動によつてその影響を受けたのであつた。

(26) Vgl. Ernst Baasch, *Holländische Wirtschaftsgeschichte*, 1927.

(27) Alexander Bugge, *Die nordeuropäischen Verkehrswege im frühen Mittelalter und die Bedeutung der Wikinger für die Entwicklung des europäischen Handels und der europäischen Schifffahrt*, in: *Vierteljahrsschrift für Social- und Wirtschaftsgeschichte*, Bd. IV, S. 227-8.

斯くて漸次的にはあるが然し決定的に、とビレンヌは云ふ、西歐がその様相を變へたのは十二世紀に於いてで

あつた。一言にして云へば、上記經濟的發展が、農業支配の社會組織に於ける固定性を解き放つたのであり、商業と工業とは農業と相並んでその位置を占めるのみでなく、この後者に對して反作用したのであつた。そしてこの交易發達の影響は羅馬の舊都市に新生命を吹き込み、そこには再び人口聚集を見るに至つた。或は商人聚落がブルクを繞つて形成されたが、それはまた海岸に、河岸に、交通路の交會點に位置するものであつた。そのいづれも市場を開設し遠近の注意を惹いた。そしてその大小いづれにせよ、それは事實上社會にとつて不可欠のものとなるに至つた。(28)

また云ふに、進歩の道程を辿つて新たに再興した歐羅巴は、古代のそれと似るところあるものであつた。然し政治組織内に於ける都市の役割が古代に於いては中世よりもより大であつたと云ふならば、その代り中世に於ける都市の經濟的影響は古代に於けるそれよりも大であつたと云ふべきである。即ち羅馬帝國に於いては、大商業都市と名付くべきものは、羅馬、ネエプルス、ミラン、マルセイユ、リオンを數ふるのみ。それは十世紀初頭に於けるヴェニス、ピサ、ジェノア、ブルツヂェの諸港、ミラン、フロオレンス、イイブル、ガン等の工業中心地に比すべきものを有することなかつた。勿論十二世紀のゴオルに於ける重要地點は、オルレアン、ボルドオ、ケルン、ナント、ルウアン等の古代都市であつたことは事實であるが、然しそれ等はいづれも羅馬帝國治下に於けるよりもより優越せるものであつた。中世歐羅巴の經濟的發展は、羅馬帝國に於ける限界を遙かに超えたものである」と。(28)

(28) Pirenne, Op. cit. pp. 104-5.

(29) Ebenda, pp. 106-7.

しかもここに云々せられる商業の復活は、ビレンヌに於いては、結局、前述の如く外的影響の結果たるものであつた。即ち、伊太利諸都市が地中海から回教徒を驅逐したこと、並びに獨逸諸都市がスカンディナヴィア人を北海及びバルト海から驅逐したこと。換言すれば、この歐大陸の南北兩端に横はる二つの内海の支配權獲得によつて、一からは東洋市場への、他からは露西亞・スカンディナヴィアの市場への途が確保せられた結果と見るのである。そしてこの他面に於いてこの南北兩端より内地への進展は、十二世紀に於いてヴェニスとブルツヂェとを結ぶ自然的通路の中點に於いて、即ちシャンパニエの平野に於けるトロエ、ラニイ、プロヴァン、パア・スウル・オオプの定期市を結果したと做す。

六

ここに再興せられた商業活動を惹き起し、且つこれを全歐羅巴に擴大せしめたものは、云ふ迄もなく商人であるが、彼等はいづれより發生したものであらうかが尋ねられねばならないであらう。然しこの商人階級の勃興も亦、その言葉によつて示さるる如く、十世紀乃至十一世紀の西歐に於けるそれを求めることが、本稿の課題の範圍に合致するものである。従つてホオマア時代の希臘人の間に於ける、或はヴァイキングの間に於けるそれ等は、すべてここに採り上ぐべきものではない。而してまた、前述のイスラム侵入によつて歐羅巴大陸が、その傳來の市場を喪失し、かくて農業生産の支配の下に置かれるに至つたカロリング朝時代に於いて、猶太人、渡り商人、機會商人等が偶發的交易を營んだことは、これを見ることが出来るのであるけれど、これ等を以つて十世紀にその最初の徴候を示した商業復活の先驅と爲すことには、餘りにその規模に於いて懸隔するところある爲め、これを得ないとビレンヌは云ふ。素よりビレンヌのこの言葉を理解する爲めには、先づ以つてこの期に於いて復活せる商業の規模を知ること

とが必要であらう。

十世紀、十一世紀に於ける西歐社會が、約言すれば、未だ粗野なそれであつたことは敢て述べるまでもないことであらうが、かかる條件の下に於いて商業の如きは、團結の力に倚つてのみ可能であつたと云はねばならない。様々の危険、危害の恐れある場合、それは何よりもこれに對する共同防衛の爲めに團體結成が必要であつた。しかもみならず、定期市又は市場に於いて紛議の起つた場合、その裁判に際して有利な證人は組合人の中からのみ見出されるのであり、又共同しての場合には、單獨の資力にては到底不可能な大量の商品を購入することも出来、更には團體信用を利用することによつて競争相手を破ることも容易である。即ちその海上たると陸上たるとを問はず交易の安全は實力の行使のみによつて保證せられ得るのであり、しかもこの後者は團結によつて生ずるところのものであつた。この隊伍を組んでの商人は、十世紀初頭以降西歐に於いて多數見出される。而してこれ等の團體を支配するものは連帶の觀念である。従つて商品の賣買は共同に行はれ、利益の分配はこの組合に對する各人の持分によつて定められる。そしてこれ等の團體は、普通遠距離に亘つて旅行したのであつた。即ち伊太利商人が巴里へ、フランスダスへ向つた如き、十世紀末倫敦を正規的に訪れるものは、ケルン、ユイ、ディナン、フランダス、ルウアンの商人であつた如き、ヴェルダンから西班牙に達した如き、巴里の水商ハンスがルウアンと交易した如き。従つて中世の經濟的復活を特徴付ける交易は長距離に亘るところの、謂はゞ可成りな大規模のものであつたと云はねばならないであらう。それ故にこの期の商業を地方的なもの、即ち地方的市場の圈内に限られたものと做すことは、全く誤謬であるとピレンヌは云ふ。⁽³⁰⁾ しかもこのことの行はれたのは、かかる態様こそ彼等商人にとつて多大な利益を實現する唯一のものであつたからに外ならない。商人の旅程の長距離である程その利益は層一層大であつたか

らである。

(30) Pirenne, Op. cit. pp. 125-6.

この期に於ける商業の規模をかくの如きものに求め、この復活を負擔した商人の發生の在り場所を見出すといふからには、通説とも云はるべきところの、商人階級は漸次隸農大衆の間より生じたと做すもの、或は領主の管理人の間に又は僧院の生活資料購入や餘剰生産物賣却を委ねられたその從屬者の間にこれを見出すもの、等はいづれもピレンヌにとつては誤謬以外の何物でもない。前者に就いて彼は云ふ、世襲的に土地に拘束せられて居る隸農にとつて、とまれこれによつて確保されて居る生活を轉變極りなき商人の生活と交換せしめるやうに誘ふ可能性が何處に存すると云ふのであるか。當時の社會狀態及び一般的生活態度から見ても、事態は全く逆であると。後者に就いては、大なる影響を及ぼすに足る程の僧院商人が存在しなかつたこと、彼等は執意を有せざる單なる被備者に過ぎぬこと、従つて自己の計算に於いて營みをするもの無きこと等を以つて、その否定の論據として居る。⁽³¹⁾

而して更に云ふ、確言し得ることは商業なる専門的職業がヴェニスに現出したといふことである。ハイネンの云ふ如く、十世紀に於いて爲しとげられたヴェニスの商業技術の範圍は非常なものであつた。歐羅巴に於いて教育が僧侶の獨占物であつたこの期に於いて、ヴェニスには既に筆記術が普及されて居た。これによつて海上貸付の如き信用制度は可能となり、又この後者によつて商業は多大なる發達を得られた。しかも尙このヴェニスの商人の財富が急速に増大した所以を爲すものは、その商業組織がビザンティウムのそれと、従つてまたこの後者を通じて古代のそれと密接に關聯づけられてゐることである。この都市はその地理的位置からしてのみ西歐に屬するのであつて、その生活、その精神のすべては、西歐のそれとは全くフレムトであつた。そしてこのヴェニスは他の海岸都市に多

大な影響を及ぼし、それは十一世紀にその顕はな姿を、ピサに、ジェノアに、マルセイユに、バルセロナに示し始めた。然しこの商業活動を徐々に海岸地方から大陸内部へ擴め行くところの商人階級の形成に、ヴェニスに寄與するところあつたとは考へられないのである。即ち十世紀に於いて歐羅巴大陸に専門的商人階級が再現し十一世紀以降その數を増加したのであるが、これとヴェニスのそれとはその間に關係を見出すことを得ないのであるとピレンヌは主張する。

この大陸内部に於ける再現は、これと時期を同じうする人口の増加と關係して居るとピレンヌは云ふ。人口増加は多數の人々を土地から引き離し、これを流浪者たらしめ、修道院への物乞ひ、農業臨時雇、傭兵、掠奪者等たらしめた。この束縛なき冒險者の群の中から最初の商人階級は發生したとピレンヌは見ると見る。即ちこれ等の人々が利を追ひ職を求めて各地を流浪する間に、諸國の言葉を知り、またその事情に通ずるに至り、しかも一度幸運をかち得て利益を得たる時は、更にこれを基本としてその技能と知識とを以つて多大の利益を博する。かかることは交通の不完全であり、販賣商品の比較的稀少な時代に於いて、その賣價を甚だ高めることによつて容易に贏ち得るところと云はねばならない。そしてその好個の事例として、彼はフィンチュエルの聖ゴドリックを擧げるのである。(32)

(32) Piranne, Op. cit. pp. 111-2.

(33) Ebenda, p. 120.

聖ゴドリックの経歴については Valher Vogel, Ein seefahrender Kaufmann um 1100. in: Hansische Geschichtsblätter, Jg. 1912. H. I. S. 239-48.

このゴドリックの経歴からしても明かなるやうに、商人はその最初に於いて流浪者、従つてまた他所者であつた

ことは、既に通説となつて居ると云つてよいであらう。殊に中世の商業が仲介的の性質のものであることからして、このことは容易に理解せられ得る。(33)

(33) 本誌第二十七卷第一號所載、拙稿「ハンザ同盟に於ける中世的要素」二四一—五頁参照。

然し、更に一步を進めて考へるならば、この他所者、流浪の民は、いづれから來たのであるか。結局この流浪といふことは、農業人口の過剰から由來するものではないか。ジイフェキンは、してみれば、商人の發生は通説の如く、この人口過剰の母體であるところの封建的農業經濟と關聯し、またこれからしてのみ理解せられることになると批判を加へて居る。(34) そこには、何等これを否定すべき理由の存することを見ない。寧ろ前述のピレンヌの否定論こそ奇矯な論斷と做すべきである。この點ジイフェキンの批判は正しいと、筆者には考へられる。ピレンヌは正しい解答の近くにまで立ち入り乍ら、遂に目的を得なかつたものと云はねばならない。然し尙ジイフェキンの批判も、それが農業的封建的自足經濟の解體期に際しての商人の發生に關するものとしてのみであることが注意されなければならぬであらう。

(34) Steveling, Op. cit. S. 1035.

七

ともあれ、ここに新たに發生した商人は都市勃興に際して現はれる。しかもこの都市の勃興たるや、前述の商業復活の結果たるものである。勿論この商業活動の復興は、工業の勃興と密接に關聯する。この兩者の交互作用、そしてまた、工業の進歩はこれが都市に集中せられるに及んでその程度を増大したと等は、あまりに周知のことが

らであるが故に、本稿に於いてこれ等の叙述を省略してもよいであらう。

中世商業の先驅的擔當者たる *Peripatetic Merchant* は、その旅程の中途に於いて、または季節によつて交通路をとざされた時に於いて、その商業組織上當然可及的安全且つ便利の地點に宿營し、やがて、それを財貨蒐集地點とし、聚落とするに至つた。それは多くの場合、羅馬の舊都市及び城塞であつた。と云ふのは、彼等の欲求する自然的條件に適合するものが、右の場所であることが多かつたから。然し勿論これに限つたものでなく、例へばネエデルランドに於けるものは、古代都市との傳來的關聯なきものであるを普通とした。それは謂はゞ新都市の萌芽たるものである。が、これ等も亦、ビレンヌに據れば、この處女地に建設せられたが故に然るのではなくして、嘗てのノルマンの侵略後に設けられたところの防禦工事を施せる圍廓の存在を前提とするものであり、このブルクの周圍に商人は聚合したのであつた。とは云へ、このことからしてブルクから都市が發生したと做すのは正確でないのであつて、都市はブルクの近接地に發生し、ブルクから發展したものではなかつたと云はねばならない。即ちブルクは單に軍事的目的のみを持つものでありその大きさは固定的であるに反し、商人聚落(*Ports*)は商業によつてのみ形成せられその活動の旺盛となるに従ひその境域を擴大し遂には古代の城塞をその中にとり入れるに至つたものである。(35)

(35) Henri Pirenne, *The Place of the Netherlands in the Economic History of Mediaeval Europe*, in: *The Economic History Review*, Vol. II. (1929), No. 1, pp. 27-8.

ビレンヌは云ふ、この最初の聚落は九世紀以降多數開設された市場の存在に基くものであると主張されることがある。然しそれは妥當なものではない。何となればカロリング朝時代の市場は、その近隣の農民及び僅少の行商人

の訪れる地方的市場に過ぎないのである。従つて商業人口を誘引するに足る程度のもではなかつたし、更に、この種の市場を具有しながらも遂に都市たり得なかつた數多の地點が存在するからであると。次ぎにこれが市場ではなく定期市場である場合も同様である。事實多數の定期市は甚だ重要なものであつた。例へばフランダースに於けるトゥウロウやメッシンの如き、佛蘭西のバア・スル・オオブやラニイの如き、十二世紀末まで中世交易の主要中心地であつた。しかもこれ等の場所が都市たるに値しない地點になつて居ることは、それ等の活動力が如何程大なるものであつたにせよ、交易の固定に必要な永久的性質を缺くが故に外ならない。これに反し、ヴォルムス、シパイヤア、マインツの如きは、定期市を有することなかつた都市である。それ故に、商人聚落にとつての必要條件は、羅馬舊都市又は城塞地に結びついたところの地理的位置であるとビレンヌは論じて居る。(36)

自然的條件を克服し得ぬ未發達の社會に於いては、先づ以つてこれに順應することを計り、それに従つて生活を規制する。約言すれば、中世に於ける右の聚落は自然環境によつて決定せられるものであつた。而して十世紀以降歐羅巴に於ける商業復活の進化と共に、羅馬の舊都市内に、又は城塞の傍に設けられた商人聚落は、その成長を見るに至つた。經濟的活動力の旺盛さによつて聚落人口は増加した。殊に最初設けられたそれは、當然商業生活にとつて最も有利な地點であつたから、その増加は多大であつた。従つて、ビレンヌはここに、一般に或る地方の大商業都市は最古なものであることの説明が存すると云ふ。(37)

(36) Pirenne, *Op. cit.* pp. 141-4

(37) Ebenda, p. 145

上記の如く、これ等羅馬舊都市に於ける、又は城壁の傍に於ける商人聚落が、必ずしもすべて商業中心地となり、

やがて都市となるとは限らなかつた。この運命に陥るもの、それはビレンヌの言葉を以てすれば、その位置が商業中心地たるに適せざりしものであつた。即ち中世の莊園經濟の下に於いて、その有する富と勢力とを以つて著名たりしものも、交通幹線から遠く相離れて位置し、従つてかの經濟的復活によつての影響を受くることなかつた場合には、精々半ば農村的な市場都市以上に出づることなかつたのである。然しこのことは、ビレンヌに據れば、都市への進展の過程に於いて、この舊都市と城塞とが單に補助的機能のみを持つといふことを示すに適切なるものではないのである。即ち、都市勃興期の社會組織とは全く異なる社會秩序に適應して居たところで、尙都市はそれ自らの力によつて都市たり得ることは出来ないものである。と云ふのは、都市は、謂はゞ商業活動の結晶點とも云ふべきものであり、而してこの商業活動たるや羅馬の舊都市や城塞から生じたものではなく、それはその外部からこれ等舊都市や城塞に齎らされ、その際有利な地位上の條件が加はつて都市となつたものと云はねばならないから。従つて舊都市や城塞が都市發展過程に於いて演ずる役割は謂はゞ受動的なものと云はねばならない。即ち都市發展の經過を辿る場合、舊都市外の商業聚落は、封建的ブルクよりも遙かに重要な位置を占めて居るのであり、この前者こそ能動的要素たるものであつた。従つてこの點に、經濟的復活の結果たるに過ぎなかつた都市生活の再興は説明せられるのである。(38)

この能動的役割を演ずる舊都市外の商業聚落は交易の活況を呈すると共にその外敵防禦の必要からして圍廓を設くるに至つた。即ち *novus burgus* 形成、これである。そしてその中世都市への轉化、更にこの都市内に於ける商人に就いて、それ等は、すべて前記理由に基きここでは割愛してよいであらう。

(38) *Pirenne, Op. cit. pp. 151-2.*

大略ながら十一世紀に於ける西歐羅巴の商業の復活を、そしてそれに關聯する限りに於いて中世都市の發生を、以上の如く辿り來つて、ここに尙筆者は次のことに答へるところなければならぬ。即ち、曩に筆者は一つの問題を未解のままに残し來つたからである。それは右のブルク建設が、中世都市に於ける新たなものとして見らるべきか否かの問題であつた。それはまた中世都市が古代都市の發展の連続と見らるべきものか否かの問題である。然しこの問題は、實のところ中世都市の検討が十分に行はれて後に採り上げらるべきものである。然し、一應上述を以つて本稿を結ぶ以上、これに對して暫定的ながら答へて置きたいと思ふ。この解答の爲めに、以下に於いて中世都市とは、本稿の課題とした商業復活期に於けるそれを指すとの限定を加へて置くであらう。

いま、純粹に都市の内的發展の跡をのみ辿る場合には、當然、古代都市より中世都市への發展の連続は認められるであらう。中世都市——素よりこの場合、右の局限せられた意味の——が羅馬の舊都市の上に、勿論舊都市の全部がではないけれど、再興したとも見られることは、この兩者の間に「傳來の細きつなぎの絲」の存在することを容認せしめるものであらう。更には、ビレンヌも云ふやうに、古代都市は行政中心地であつた。これは中世に於いても、僧正都市に於いて特にその意義を残存するものと云はねばならない。然し中世の商業復活期に於いて見られる商人聚落に於いては、これを見出すことが困難であらう。とは云へ、やがてこの新たなブルクがその中に、新たな廣場を設けたとき、それは行政の中心點でもあつた。これから考へるならば、右の相互の間に於ける發展の連続はこれを見出すことが出来よう。然しこれを取り出すことは、上記の限定を越へて居るかと考へられる。

ともあれ、かくの如く行政中心地としてその發展の連続を辿るとするならば、そこには中世都市の特質は何等表明されて居ないと云はねばならないであらう。では、この「傳來の細きつなぎの絲」に結ばれた「質的に全く新たな

るもの、即ち謂はゞ中世的なるものを何處に見出すことが出来るのであらうか。

それはジイフェキンクも云つて居るやうに、「必ずしもこの行政中心地點と一致することを要しないところの商人聚落」の中に、見出されると云ふべきである。この意味に於いて、右のブルク建設は新たなもの、古代都市に於けるブルクとは全く異つた性格が與へられる。またこの意味に於いて、中世都市が新ブルク建設に基くもののみと做すならば、古代都市よりの發展の繼續は、これをとり出すことを不可能ならしめられるであらう。そしてジイフェキンクの言葉を借りれば、「ビザンツではなくしてヴェネディヒが、羅馬ではなくしてフロオレンツとジイナとが、巴里ではなくしてフランダース諸都市が、倫敦やコペンハーゲンではなくしてハンザ諸都市が、新たな發展の負載者である」(39)と、云はねばならないのである。然し再三繰り返へすまでもなく、この言葉は、本稿の課題を越えて居るところあることに注意が拂はねばならない。

(39) Steuding, Op. cit. S. 1033.

尙これを他の視野から窺はう。曩に筆者は中世社會の發展の獨自的特質を指摘するところがあつた。このことにして容認せられるならばこれと同じく中世都市も亦、その發展の獨自性を持つと云はねばならないと考へられる。縱令羅馬の舊都市の址に發生したものであつても、中世都市自體を考察の中心に置く場合には、それは尙偶然的一致に過ぎぬものであり、決してそれは羅馬舊都市の、従つてまた古代都市の繼續ではないのである。それ等は羅馬帝國の崩壞の結果として、古代都市としての存在理由をば既に全く喪失してしまつて居るものである。謂ゆる中世の社會的經濟的構成が古代のそれと截然區別せらるべきものである以上、その各々の構造内にその場所を占める中世都市と古代都市とは、これまた別個の秩序に屬するところのもの、従つてそれ等は區別せらるべきものと云はね

ばならない。前者が羅馬の舊都市と同一場所に發生したのは、古代都市の再興ではなくして、中世都市一般の勃興の因由と相等しきもの作用に基き、ここに新たに中世都市として發生するに至つたものである。この意味に於いて、古代都市と中世都市との間に發展の繼續を主張することは、肯定し得ぬところとなる。素より上述の如く、中世都市にして、十一世紀に於ける商業復活に際して羅馬の舊都市の上に再興したと見らるべきものは存する。然し、それは單なる表面的觀察よりして再興と做されるのであつて、その存在の意義は、古代都市と全く相異るところのものであると云はねばならないのである。